

趣味が高じてギター制作

プロ愛用「本物の音」

「演奏よりモノ作りに向いていたようです」



自宅の作業場でギター作りに熱中する広川さん。松山市住吉2丁目

松山市の会社員が趣味で手作りしているギターが評判だ。「本物の音が出る」とプロのギタリストも愛用するこのギターの制作者は、N.T.T.四国技術総合センターに勤務する広川憲二さん(58)。松山市住吉2丁目。休日や出勤前の早寝を惜しんで自宅の作業場にも入り、せっせとギター作りに励んでいる。「定年後のライフワークに」と語る、四国山地の山あいの上野谷郡栗谷村に空き家を借り、「ギター工房」の準備にも忙しい。広川さんの自宅作業場を訪ねた。

「いまが青春」 松山・広川さん

「ギターが四十年来の趣味の証先に、骨十四枚ほどの一作りには約三百もの工程」という広川さん。自宅 広さの作業場がある。ギター がある一方で、音響系ソコ

ギリやカシなど各種の工具類がずらりと並ぶ。三年前から本格的にギター作りを始めた。二、三本のギターを同時に作り、現在三十本目を制作中だ。

●ギターは青春

広川さんとギターとの出会いが高校時代。古賀政男の曲が載った教則本を買った。当時、ギターは高級品で九千円もした。小遣いをためるなどして、やっとの思いで手にした。「高校を出て勤め先会社の初任給が八千七百円。高校生にはせいとくなく安い物でした」

友人らとギターサークルを結成し、クラシックを中心に演奏の腕を磨いた。日雇大工が好きで広川さんは二十七、八歳のころに一度、手作りギターキットを買ってギター作りに挑戦したことがある。「形はギターだけれど、雑音ばかりのひどい出来でした。妻の美恵さん(30)も「あれはひどい

こと」と苦笑する。ギター作りの夢は一時中断した。

●夢再び

忘れていた夢を思い出させたのは、一台の壊れたギターだった。ギターに詳しい広川さんは、いつも友人や知人からギターの修理を頼まれた。その中、分解修理が必要なほど壊れたギターがあった。「完全に分解して蘇らせよう——」

アイデアがわいた。部品を取り換え、最初から作り直したギターは、一言一言がはつきりとして、自分好みの

響くほど満足いく音が出た。三年前のことだ。

ギター本体を型を組んで作るには、板を渡す必要がある。プロのギター制作者なら専用の機械を使うが、広川さんは古い鉄ア

ンダーを使う。材料は外国からも取り寄せる。楳板と裏板はロースウッド、表面はスプルース、弦が通るネック部分はマホガニー、指板は黒檀。「一つ一つの作業をミリ単位で正確にしなければ、あとで大きなひずみが出る」と広川さん。演奏者の個性に合わせた音作りに妥協はない。

●広川ギターで演奏会

フラメンコ音楽を得意とする松山市の若手ギタリスト、兵頭満さんが二十八日午後六時半から、松山市越前町の県女性総合センターでリサイタルを開く。使うギターは広川さんの手作りギター。好評でチケットはすでに売り切れた。

「演奏よりモノ作りが向いていたようです。いまが私の青春」と広川さんは妻と顔を合わせた。

